

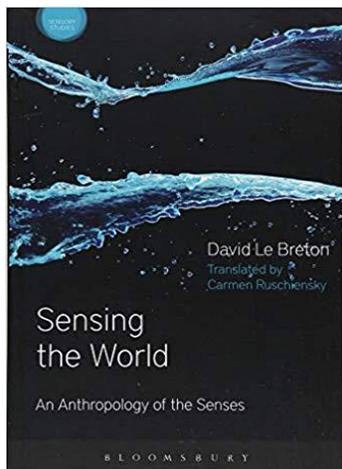
【書評・紹介】

Le Breton, David

Sensing the World: An Anthropology of the Senses. Ruschensky, Carmen (transl.)

(Bloomsbury Academic, November 2017, 312 pages, £ 26.09)

インガ・ボレイコ



本書は世界の理解の在り方における身体的な感覚の役割を検討するものである。ここでいう「感覚」は生物学的な枠組みに限定せず、文化的、社会的な文脈の中でも捉えられている。本書において、感覚は個人が自らの身体で経験するものと同時に、個人とコミュニティーの繋がりを通して現れてくるものとして描かれている。

各章において、五感が一つずつ取り上げられており、各感覚をめぐる議論は豊富な事例で支えられている。本書は主に理論的な著作であるが、筆者が用いている事例の範囲は幅広く、哲学、宗教、文学、歴史などの分野を網羅している。さらに、その事例は民族誌や文献に限らず、心理学的な実験も数多く紹介されている。また、本書の特徴の一つは、五感と共にそれと正反対の概念を取り上げることである。例えば「見る」と同時に、「見えない」とこととはどのようなことかが議論される。このように、盲目、聴覚障害、摂食障害、嫌悪感などが五感の重要な側面として語られる。

本書はフランスの人類学者、社会学者であるル・ブルトンが 15 年間以上かけて作成したものである。現在、ストラスブール大学の教授である筆者は身体、その表象、感覚を中心に研究し、今まで 30 冊以上の著作を出版している。本書は *Sensory Studies* というシリーズの一冊として初めて英語で翻訳されたものである。以下は各章の簡潔なまとめである。

第 1 章は知覚することと感覚することとは何かを中心に上げ、感覚の人類学を概説するものである。人間は世界に意味を付与する存在であるが、物事を認知する前に、それを知覚する。したがって、世界を身体で感じ取ること自体は物事との象徴的な関係性を作ることであり、その関係性が意味を生み出すものになると論じている。本章は世界の感じ方を、より詳細に言語、文化による感覚的な相違や、西洋における視覚のヘゲモニーなどのトピックを通して検討している。

第 2 章では、視覚が取り上げられ、視覚における二つの重要な特徴が強調される。一つ目は、視覚は世界を単に記録する感覚ではなく、物事に意味を付与するプロセスでもあるという点だ。例えば、一瞥 *glance* と凝視 *gaze* が区別される。日常的に無意識に多くのものを一瞥する中で、凝視されるものは意図的に選択される。それは視覚による世界の解釈である。加えて、二つ目の特徴は、視覚には「見る」だけでなく、「映し出す」という側面もあるという点である。現実を「見る」ことは、それに自らの文化的フィルターをかけることとされ、視覚されるものは自分の世界観を映し出したものだとも言える。筆者はそれを幼児が見る世界、盲目や闇、色の分類といった事例を通して語る。

続いて、第 3 章は聴覚に着目する。視覚と同様に聴覚も文化的な背景と切り離して考える

ことはできない。音には必ず社会的、象徴的な意味が刻まれている。そうでなければ、音は雑音として捉えられる。本章は雑音を都市化や機械化、文化的な相違などを通して検討している。これらに加えて、沈黙と聴覚障害が語られる。筆者は、西洋におけるコミュニケーションで聴覚が最も重視されているが、それは普遍的な実践ではないと指摘する。手話の使用、身体で感じ取る振動などは聴覚に依拠しないコミュニケーションの手段である。つまり、聴覚障害は沈黙の世界ではないとされる。本章は他に起源の神話における音の役割、音の政治性などのトピックも取り上げている。

次に、第4章では、人間が最も早く持つようになる感覚である触覚が注目される。子宮内の胎児の事例などから、触覚を通して自分と外在的な世界との境界が初めて認識されると筆者は指摘する。触覚を通して皮膚は接触の記憶を保ち、その記憶は我々の世界との関係性を形作る基礎になると述べる。そのため、本章は多様な育児実践を詳細に検討し、社会的に不可欠な能力を獲得する過程における触覚の重要性を示している。その他にも、接触の剥奪、ケアにおける接触、盲目と聴覚障害を持ったヘレン・ケラーの人生を描き出し、触覚中心の生き方が語られる。

第5章では、嗅覚が論じられており、そのキーワードとして、「自己」と「他者」が挙げられる。嗅覚に関して、筆者は自らの身体を疑うべきだと指摘する。なぜならば、他者の匂いをすぐ区別できる一方で、自分の匂いは認識しづらくなっているためである。この嗅覚による「他者化」は人種主義や民族中心主義と関連付けて議論され、生物学的な優劣関係を正当化するためのプロパガンダとして用いられた事例が紹介されている。また、匂いの相対性にも着目し、嗅覚はどのようにそれぞれの時代における道徳観と結びついてきたかという問いが検討されている。

五感の最後として第6章では味覚が取り上げられる。本章の中心的なテーマは食事であるが、食べ物を味わうことは味覚だけでなく、五感全てを統合するプロセスだと指摘する。食べ物の美化から食器の選択まで、食事は味覚に留まらない。さらに、味覚は完全に個人的な感覚とも言えない。筆者はそれを飲酒の事例で示す。酒を初めて飲んだとき、その味自体を美味しいと思わなくても、社会の一員として味を経験するごとに、味自体が変わらなくてもその味に対する認識が変化し、違う味に感じられるというケースが記述される。本章は世界の食文化以外に、味覚とアイデンティティ、ファストフードの普及にも注目する。

最後に第7章では味覚の延長として、食べれないものに対する嫌悪感に着目する。本章は人間が食べ物と結ぶ象徴的な関係性やその時代に応じた変化を検討している。そのなかで中世ヨーロッパにおける薬としての人間の身体や排泄物の利用、人食いのタブーとそれが生み出すトラウマなどの極端な事例が論じられる。嫌悪感で身体の内在的、外在的な世界のバランスが保たれることが述べられる。

本書は西洋における五感を出発点として、それと異なる事例を用いながら、世界における感覚の多様性を検討するものである。また、文化の比較に限らず、西洋の歴史を反省的に捉え、感覚が時代と共に変化してきた過程にも注目している。しかし、筆者は本書で「文化」をどのように捉えているのかについて言及しておらず、グローバル化や多文化主義にも触れていないため、「他者」と「文化」が本質主義的に描かれる側面もある。だが、事例の豊富さにより感覚の自明性を崩す試みとして、大変刺激的な著作であると言えるであろう。

(いなが・ぼれいこ／北海道大学大学院文学院)